

研究の概要

はじめに ～本校の学校教育目標と教育研究～

本校では平成8年度より次の学校教育目標を掲げ、その実現に向けて教育活動を展開している。

学校教育目標	
「ともに学び ともに生きる 心美しき子ども」	
元気な子	心身ともに健康で、正しい判断力をもって生きる子
思いやる子	美に感動し、思いやりの心で接する子
考える子	価値を見だし、学び方を身につけながら進んで学ぶ子

学校教育目標には、本校がめざす子どもの姿が示されている。「ともに学び」とは、人との関わりをもちながら主体的に学ぶ姿である。「ともに生きる」とは、個性を尊重し合い、認め合うなかで協調性・社会性をもって生きる姿である。「心美しき」とは、美しいものに対して感動する心を原動力として生きる姿である。また、めざす子どもの姿には、それに迫るための授業のあり方に対する本校の一貫して変わらぬ主張も込められている。それは、「授業とは、子どもの主体的な学びの場である。」ということである。めざす子どもの姿において示される育てたい資質・能力は、「主体性」「協調性」「社会性」「美しき心」である。これらは、子どもの将来の生き方を支える基礎ともいうべきものである。そして、単に均質な知識及び技能を、いかに効率よく教授できるかという観点からの教育だけでは実現することはできない。

そこで、本校では「学ぶという行為は、本来自発的・主体的な営みであり、子どもからわきおこる知的欲求を自ら充足させようとする姿勢に支えられている。」という前提に立ち、長年にわたり「子どもが真ん中」の教育研究をすすめてきた。その際に、目の前の子どもの実態を分析し、その時々々の時代背景や、それにともなう教育への社会的要請に応じて研究主題や研究副題を設定してきた。研究を重ねるごとに、研究主題は変化しても、子どもの実態を出発点としていることは変わらない。学びたいという関心・意欲を原動力とし、子どもの「わかる」過程や内面に育まれる力に寄り添った教育課程の開発や改編、指導方法の工夫、評価方法の開発等に取り組んできた。このようなスタンスは、これからも継承していく。

I 研究主題設定の理由

(1) 社会情勢

2020年3月、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが宣言され、日本だけでなく世界の先行きはより一層不透明なものになった。また、このパンデミックは、私たちに大きな影響を与え、経済や社会、当たり前だった生活や行動、そして価値観を見つめ直すきっかけにもなっている。OECDは2015年よりEducation2030プロジェクトを進めている。2030年は、VUCA（不安定、不確実、複雑、曖昧）が急速に進展する世界になると予測されているが、そこで必要になるキー・コンピテンシーや、それを育むためのカリキュラムの方向性について検討するプロジェクトである。アンドレアス・シュライヒャーは「不確実な中を目的に向かって進んでいくためには、生徒の好奇心や想像性、強靭さ、自己調整といった力をつけるとともに、他者のアイデアや見方、価値観を尊重したり、その価値を認めることが求められる。また、失敗や否定

されることに対処したり、逆境に立ち向かって前に進んでいかなければならない。」¹と記している。パンデミックにより、すでに VUCA な時代が現実となった今、まさにその力が求められているといえる。

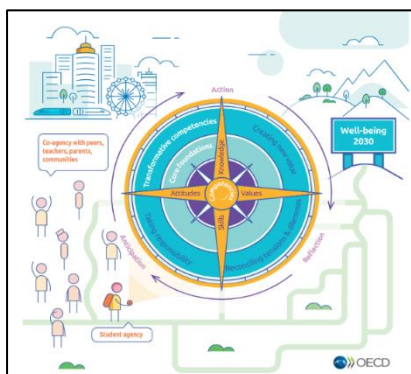


図1 OECD ラーニングコンパス 2030 出所：OECD(2019)

OECD の Education2030 プロジェクトにおいて、2019 年に出された最終報告では、個人及び社会がよりよく生きるウェルビーイングに向かうための学習枠組みであるラーニング・コンパス²が提示されている。コンパスの針にはコンピテンシーの構成要素として知識、スキル、態度、価値が示されている。また、円周の内側には、2030 年に求められる「変革を起こすコンピテンシー」を挙げ、①新たな価値を創造する力、②対立やジレンマに対処する力、③責任ある行動をとる力、の3つの力を位置づけている。3つの力を構成する要素は次の通りである。

表1:3つの力を構成する要素

①新たな価値を創造する力	目的意識, 好奇心, いろいろな考え方に対して開かれた考え方, 批判的思考力, 創造性, 協働, 敏捷性, リスクを適切に管理していくこと, 適応力 など
②対立やジレンマに対処する力	認知的柔軟性, 他者視点の獲得, 自分とは異なる考え方もつ人に対する共感性, 敬意をもつこと, 創造性, 問題解決能力, 紛争解決能力, レジリエンス, 複雑さ, 曖昧さに対する寛容さ, 他者に対する責任感 など
③責任ある行動をとる力	統制の所在, 誠実さ, 思いやり, 敬意, 批判的思考力, 省察的思考力, 自己意識, 自己調整, 信頼 など

白井俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』を参考に作成

表に示されている要素は、人間が本来もつ力である。世界がより多様化、複雑化するなかで、AI が進化、普及し、人間が行っている役割のいくつかをすでにAI が担う時代が訪れている。その一方で、AI には対処できないことが数多くあるのも事実である。自分自身で乗り越えること、他者と協働して対応することが必要な場面においては、人間が本来もつ力が試されるのではないだろうか。

(2) 日本においては

多様化する社会、複雑化する社会。平成から令和へと年号が変わり、その中で教育現場においては学習指導要領が全面実施となっていった。予測困難、先が見えないというともするとネガティブな言葉がキーワードとなって飛び込んでくることが多い中、昨今の新型コロナウイルスの感染拡大による教育現場の混乱や対応は、これまでの学校の在り方を大きく考え直す機会ともなった。一斉休校やGIGA スクール構想の推進、オンラインを使った学びの急速な広まりなどが、これまでの学びを考え直すことにつながっているのも事実である。これからの時代を生きる子供たちにとって、今の学びを大切にしていくこと、教える側の教員が将来を見据えての学力を、これから求められる力をつけていくための指導を行うことが大切になる。

学習指導要領改訂においては、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの資質・能力にそって内容が示された。「知識及び技能」や「思考

¹https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf (2022年2月8日確認)

²https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf(2022年2月8日確認)

力、判断力、表現力等」のような認知的な能力とともに、「学びに向かう力、人間性等」の非認知能力の涵養についても重視されている。令和3年1月26日に出された中央教育審議会「令和の日本型学校教育の構築をめざして～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」には、次のような一文が示されている。

「急激に変化する時代の中で、わが国の学校教育には、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。」

この答申から、指導者が社会の変化に応じた授業改善を行いながら、資質・能力の育成をめざしていくことが大切であると考えられる。

（3）前研究の経過

前研究「学びをつなぐ子供—教科等の本質に迫る授業を通して—」では、教科等の見方・考え方を働かせ、個別の知識・技能を相互に関連付け学習内容を構造化していく授業を繰り返し経験することで、知識、技能や思考力・判断力・表現力等をより汎用性のある資質・能力へと高め、これからの学習や生活においてその資質・能力を生かす姿をめざした。省察する子供の姿を「自分の思考や行為のよさや価値を見出していく姿」と定義し、(i) 自他の思考や行為(目的や既習、経験、思いなど)を見つめ直す姿 (ii) 個別の知識や技能を関連付けていく姿 の2つの姿を見取りの視点としてもち、省察と本質に迫る授業との関連についても研究を進めてきた。授業のねらいを明確にし、単元構成の工夫や発問を吟味することや教科の特性に応じた手立てを講じることで、子供たちが教科等の見方・考え方を働かせ、問いをつなげながら問題解決する姿や既習事項を生かし学習を進める姿を見ることができ、一定の成果をあげることができた。また、省察を通し、自己の学びと学習内容を関連付ける姿から本質に迫る授業に省察が関わっていることも確認することができた。一方、子供が目的意識や思いをもつこと、自ら壁を乗り越えるということに課題が残った教科もあり、学びの土台となる子供たちの学びに向かう力の重要性について改めて確認することができた。

（4）子供の実態と教師の願い

前研究後、職員に子供の実態についてアンケートを実施した。アンケートから「学習内容が身につけている」「学習への意欲が高い」「やりたいことに向かっていく姿勢が見られる」「授業において主体的に発言する」などの意見が多く見られた。令和3年度全国学力・学習状況調査の結果では本校児童の正答率は平均を上回っている。学習したことを活用しようとする意識も高く、前研究での成果が表れていると考えられる。一方、職員アンケートでは「粘り強く課題に向き合う力」「困難な課題に取り組もうとする姿勢や苦手なものを克服しようという姿勢」「他者を受け入れ、共感して自分の考えを深めること」などについて課題も挙げられた。質問紙調査においては「友達と協力するのは楽しいと思いますか」という質問に対して、当てはまらないという回答の割合が若干高くなっている。これらのことより、本校児童の課題に粘り強く取り組む姿や協働的な学びについて課題点が見えてきた。

以上、ここまで述べてきたことより、その解決に向けた新たな提案を行うために、研究主題、研究副題を設定した。

II 研究主題について

I で述べた理由から、新しい研究主題を次のように設定する。なお、研究主題は、本校の研究で目指す子供の姿として設定する。

研究主題

ともに学び、学び抜く子供

「ともに学び、学び抜く子供」とは、困難な課題に対してあきらめずに向かい合い、試行錯誤しながら取り組んだり、協働して解決策を考えたりしてやり遂げようとする姿である。

「ともに学び」とは、人と関わり合いながら、主体的に学ぶことである。これは、本校の学校教育目標にも掲げられており、めざす子供の姿の1つである。本校では平成25年度より3年間は「豊かに共生することができる子どもの育成」、平成28年度より3年間は「仲間と共に学び続ける子ども」の研究主題のもと研究を進めてきた。「共生」や「仲間と共に」をキーワードにした2つの研究から、友達との関わりにおいて、自らの考えに自信をもち、自らの存在を認められる感覚（自己肯定感）が育つことや仲間との関わり合いにより学びの質が高まることが明らかになった。人と関わり合いながら、主体的に学ぶ姿は、本校だけでなく、社会情勢や現在の日本の状況を鑑みても、これからの時代を豊かに生きていくために必要な姿であると考えられる。OECDの「変革を起こすコンピテンシー」では、3つの力を構成する要素として、「協働」「他者視点の獲得」「自分とは異なる考え方をもち人に対する共感性」「思いやり」などを挙げている。また、日本においても、中央教育審議会の答申の中で「協働的な学び」の重要性について示された。予測困難で先行き不透明な社会において、課題を解決するためには、多様な他者と協働して乗り越えていくことが必要になる。学校では、協働的な学びを通して、そのための力を育てていくことが大切になるだろう。また、学習において、自分の考えを友達に伝えること、友達の考えを聞くこと、友達と話し合うこと、友達と比べること、友達と協力することなどの活動を取り入れることは、教科の学びを深めることにもつながると考えられる。

「学び抜く」とは、課題に対して自分なりに解決策を考えて取り組んだり、試行錯誤して取り組んだりしながら、やり遂げることである。この力は、本校の児童の伸ばしたい力として、職員の多くが考えている力でもある。学習指導要領においては、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」そして「学びに向かう力、人間性等」が資質・能力として示されている。「学びに向かう力、人間性等」は

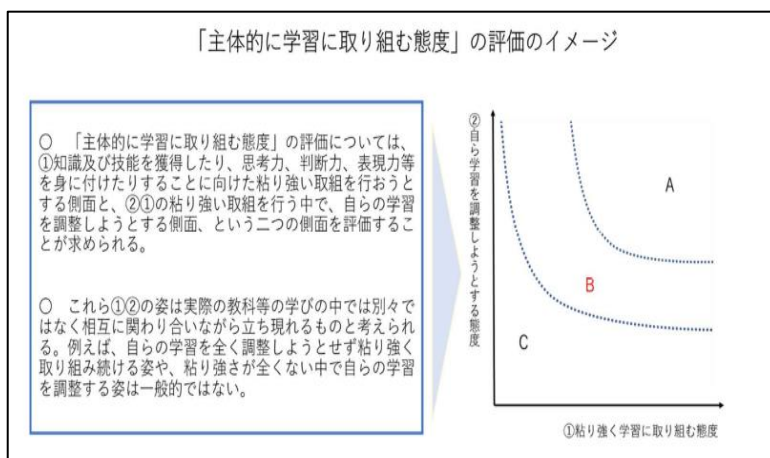


図2「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ 出典：中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」2019

評価においては、主体的に学習に取り組む態度として、「①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面」と「②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」の二つの側面を提示している。前研究では、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」に着目し、汎用性のある

資質・能力へと高めていくことを目指してきた。そして本研究において考える「学び抜く子供」の姿は、「学びに向かう力，人間性等」と大きく関連しているものであると考える。課題に対して，自分なり（自分たちなり）に考え，やり遂げた経験，つまり学び抜いた経験は，次の学びへ向かう力や困難な課題にもチャレンジしていく力になると考えるからである。

令和3年の1月に出された中央教育審議会の答申では，他者と協働し，自ら考え抜く学びが十分なされていないという指摘があることに触れている。³課題に対して，試行錯誤しながら考え抜くこと，友達とともに困難な課題に対して，向かい合ったりすることは，学習を深めるために必要なだけでなく，これからの時代を生きていく子供たちにとって必要な力であるとする。

私たちの目の前にいる子供たちは，この先，AIの発達，地球環境の変化，自然災害の増加，少子高齢化など，現在，課題となっていることだけでなく，これまでに経験したことのない新たな課題に直面することもあるだろう。そのような時にも，他者と協働しながら課題と向き合い，自ら前に進み，豊かに生きようとする子供たちの姿を願い，研究主題「ともに学び，学び抜く子供」を設定した。

Ⅲ 研究副題について

研究主題「ともに学び，学び抜く子供」を育成するために，各教科等において共通する考えとして，研究副題を次のように設定する。

研究副題

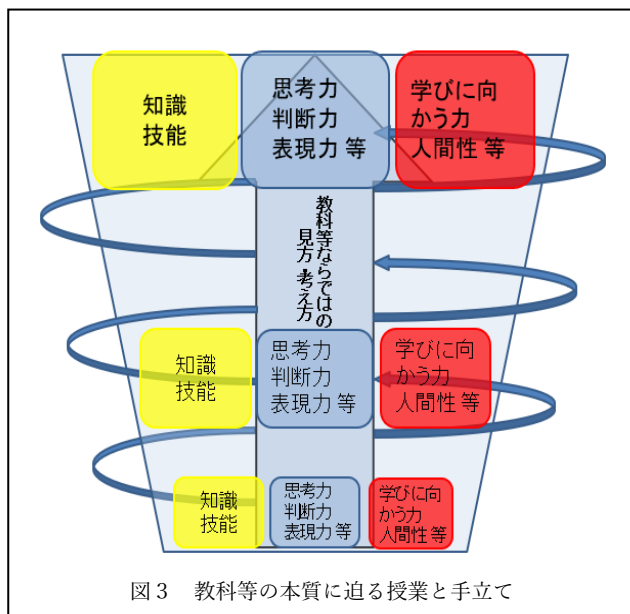
非認知能力に注目した授業を通して

研究主題の「ともに学び，学び抜く子供」を育成するために，非認知能力に注目しながら研究，実践を行い，「ともに学び，学び抜く子供」の具体的な姿を明らかにすることにした。

前研究では「教科等の本質に迫る授業」について，手立てを講じ，研究を進めてきた。図3は，前研究で示した教科等の本質に迫る授業と手立てを表した図である。本研究においては，学びを支える力となる非認知能力に注目し研究を進めていくが，図3の「学びに向かう力，人間性等」が非認知能力にあたるものであると捉える。また「学びに向かう力，人間性等」は，教科等の知識・技能，思考力・判断力・表現力といった認知能力と一体となり高めていくものであると考える。以上のことから，非認知能力のみに注目するのではなく，認知能力と相互に働いていることや一体となり高めていくことを踏まえ，研究を進めていく。また非認知能力の中には様々な要素がある。一つだけに絞らず，教材や内容に応じて複合的に高めていくことも必要であるとする。様々な非認知能力があるが，本研究においては子供の学びに向かう力のもとになるであろう「意欲」と学習や課題の取り組みに対する「粘り強さ」に注目する。

³中央教育審議会「令和の日本型学校教育の構築をめざして～全ての子どもたちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」（令和3年1月26日）に次のような一文が示されている。

「我が国の教師は，子供たちの主体的な学びや，学級やグループの中での協働的な学びを展開することによって，自立した個人の育成に尽力してきた。その一方で，我が国の経済発展を支えるために，「みんなと同じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」上質で均等な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で，「正解（知識）の暗記」の比重が大きくなり，「自ら課題を見つけ，それを解決する力」を育成するため，他者と協働し，自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないかという指摘もある。」



非認知能力の一つである「グリット(Grit)」⁴の提唱者であるダックワーズは、子供たちが何かを達成するまでの努力に着目し、評価することで、やり抜いた経験が積み重なり、自分はやり抜くことができると認識し、持続力(やり抜く力)が獲得、向上できるとしている。つまり、学び抜いた経験を積み重ねることは、学びへ向かう姿や学び続ける姿へとつながっていくと言えるだろう。子供たちが意欲をもち、思考錯誤するなどして課題に粘り強く取り組み、やり抜いた経験を評価し、その経験が積み重ねることが「学び抜く子供」の実現に必要であると考えた。そこで、子供の「意欲」と「粘り強さ」に注目し、子供が学習をや

り遂げる、やり抜く過程を大切にし、研究を進めていくことにした。

「意欲」、「学習意欲」について、鹿毛雅治は学問的に定義された概念はないとしつつ、「学びたい」という欲求や「学習を成し遂げよう」とする意思に根ざした「積極的に学ぼうと思う気持ち」を意味するものとしている(鹿毛, 2013)。授業において、子供が意欲をもつ姿について考えてみると、「やってみたい」という思いをもつ姿、友達から影響を受け「挑戦してみたい」という思いをもつ姿など様々な姿が考えられる。また、「どうしてだろう」という問いをもつことや、学習の深まりにより、「できた」「わかった」という達成感や充実感をもつことも意欲をもつことにつながると考える。鹿毛は、教師にできることとして教育環境のデザイン⁵と教育的な関わり(関わりあい)⁶により、学習を大切にする文化や風土をつくっていくことを挙げている(鹿毛, 2013)。課題の設定や単元構成の工夫など教育環境をデザインしたり、教師の問いかけや協働的な学習など関わりあいに注目しながら授業を行ったりすることは、子供の興味や好奇心、学習や課題への期待感に働きかけたり、その教科等の学習を深め、学ぶ楽しさや価値を感じたりすることにつながると考えられる。

「粘り強さ」について、石井英真は、「思考の体力や息の長さや持続力」としている。それを育てるためには、見方・考え方を働かせながら、一つの問題や事象を深く掘り下げたり、挑戦的な課題に取り組んで試行錯誤したりして、日々の授業において考え抜く経験を保障していくことが重要であると述べている⁷(石井, 2021)。授業においては、意欲をもち続けながら課題に挑戦し続ける姿や課題解決のために試行錯誤したり、自らの学習を調整したりしながら取り組む姿などが考えられる。しかし、課題の取り掛かりは意欲的であったが、それが持続しなかったり、つまづきにより取り組みに対して消極的になったりする姿が見られることがある。ま

⁴グリットは「困難、失敗、競合目標にもかかわらず、長期目標に対して示す情熱と粘り強さ」と定義されている。小塩真司編著 竹橋洋毅(2021) p30

⁵鹿毛は「教育環境のデザイン」について、課題や単元の特徴からアプローチすることや、学習者自身がどの程度、環境や学習成果をコントロールできるかという側面からのアプローチ、目標と評価に着目し、学習者にどのようなフィードバックをするかといったアプローチを提示している。

⁶鹿毛は「関わりあい」について、友人との関わりが意欲に影響を与えることや、教師が学習者の学びを促進するために大きな役割を果たしていることについて述べている

⁷『授業力&学級経営力2021年12月号』 明治図書 p17

た、課題を終えたことで満足し、追究する姿が見られないこともある。石井は考え抜く経験の保障が重要であると述べているが、これは時間的な保障だけでなく、課題に対して、見方・考え方を働かせて試行錯誤しながら向かい合うことを保障することが重要であるということだろう。石井は挑戦的な問いや課題に向き合うことやそのプロセスに価値を見出すことが大切であることについても述べており、教師がそのような学びが生まれるように教育環境のデザインをしていくことが求められるだろう。また、教師や友達など他者との関わりあいや協働的な学習が、一人では困難な課題を解決することや、一度やり遂げた課題にもう一度向き合うことにつながることも考えられる。他者との関わりあいにより認め合った経験が充足感や自信につながり、粘り強く取り組むことや意欲につながることも考えられる。

以上のことを踏まえ、子供たちの「意欲」と「粘り強さ」に働きかける授業について、教科等の特性を踏まえながら教育環境をデザインし、関わりあいに注目しながら研究、実践を行っていく。子供が課題に向き合うことに価値を見出し、学習を大切にす場をつくっていくことを大切にしながら、「意欲」をもち、学習や課題に対して「粘り強く」考え抜く経験を積み重ねることができるように、研究を進めていく。

IV 研究の目的

- ・ 授業実践を通し、「ともに学び、学び抜く子供」の具体的な姿を明らかにする。

V 研究の内容

- ・ 各教科等において、「意欲」「粘り強さ」に働きかける授業づくりを追究する。

1 年次の研究経過と2年次の研究内容

1 1年次の研究経過

(1) 各教科等における「ともに学び、学び抜く子供」の姿と「意欲」「粘り強さ」について

研究のスタートにあたり、まず各教科等において「ともに学び、学び抜く子供」の姿と「意欲」「粘り強さ」について以下のように設定した。

表2：各教科等における「ともに学び、学び抜く子供」の姿

国語	： 他者と関わりあい言葉と向き合い続ける子供
社会	： 社会のありようと向き合い、考え抜く子供
算数	： 子供が自ら問おうとしている姿
理科	： 自然界と理科とをつなぎ、仲間とともに科学的に考え抜こうとする子供
生活科	： 自らの思いや願いを明確にもち、学習対象と繰り返し関わる姿
音楽	： 協働して音楽を学習するよさを感じ、音楽的な見方・考え方を働かせながら、音楽のよさを追求する子供
図工	： 自分の思いを創造的に表し、お互いのよさや価値を認め、高め合い、よりよい表現を求め試行錯誤する姿
家庭科	： 家族や周囲の人々（友達、地域の人々など）と共に自分の考えを広げ、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫して実践しようとする姿
体育	： どの子も成功失敗、勝ち負けに関係なく粘り強く運動に取り組む姿
道徳	： 子供が道徳的価値について自分との関わりとして考え、考えたことを友達と交流し、様々な考え方や感じ方に触れることを通して、自分なりの納得解を見つけ出す姿

外国語：自身の外国語表現に広がりをもたせ、対話を続けようとする子供
総合：「探究心」をもち、物事の本質を探り続ける子ども

表3：各教科等における「意欲」「粘り強さ」

国語	<p>意欲・問いや問いに対する自らの考えをもち、伝えたいという意思を表現する姿・他者の考えにも関心を向けている姿・より最適な解を導こうと思考する姿</p> <p>粘り強さ・相手や目的に応じて、自分の考えをより適切なものにしようと試行錯誤する姿・友だちの考えを聞き、自分の考えを再考する姿・自らの考えをより高次なものにしようと、繰り返し考えを形成しようとする姿</p>
社会	<p>意欲社会のありようと向き合う</p> <p>学習対象について自分の既有知識の有無や立場を確認し、進んで「問い」をもとうとする姿</p> <p>学習対象の「原因」や「背景」に着目した「問い」や、未来社会の判断を求めるような「問い」を生み出す姿</p> <p>粘り強さ考え抜く</p> <p>「向き合う」ことによって生成された問いを追究しながら、子供が自分の考えを絶対視せずに更新・深化させながら学習に取り組んだり、社会のありようと向き合った学習を生かして、今後の社会の在り方を吟味判断したりする姿。）</p>
算数	<p>意欲自分の問いとして考えること</p> <p>粘り強さ問題解決をやり遂げようとする姿</p>
理科	<p>意欲問題を見だし続けようとする欲求</p> <p>粘り強さ見だした問題について、仲間とともに学びの調整を繰り返しながら科学的に考え抜こうとする意志</p>
生活	<p>自らの思いや願いを明確にもつ姿：仲間にも伝えていけるような思いや願いをもち、仲間と向き合う姿</p> <p>学習対象と繰り返し関わる姿：思いや願いの実現にむけての活動に没頭し、活動を次の活動につなげる姿</p>
音楽	<p>意欲音楽に対して心が動き、表現したり鑑賞したりしたいと思うこと</p> <p>粘り強さ音楽的な見方・考え方を働かせて、よりよい表現を求めたり、曲全体を味わって聴いたりすること</p>
図工	<p>・自分の思いを創造的に表し、お互いのよさや価値を認め、高め合うこと</p> <p>・よりよい表現を求め試行錯誤すること</p>
家庭	<p>意欲学習したことを自分の生活に生かそうとする姿</p> <p>粘り強さ『よりよい生活』の実現のためにはどうしたらよいか考え、工夫し、実行してみようとする姿</p>
体育	<p>・どの子も熱中し続ける：心が学びの対象に向かっている状態</p> <p>・失敗から学ぶ グッドルーザー：負けたことを振り返り、次に活かすことができる</p>
道徳	<p>意欲道徳的価値について子どもが自分との関わりで考えること</p> <p>粘り強さ道徳的価値について様々な考え方に触れ、自分なりの納得解を見つけ出すこと</p>
外国語	<p>*めざす子供の姿として</p> <p>・相手意識をもち、意欲的に言語活動に向かい、対話を通してともに学ぶ</p> <p>・粘り強く学びに向かうことで、自分の外国語表現に広がりをもたせる。相手との対話を続けようとする</p>
総合	<p>意欲目の前の問題を「何とかしたい」と思う子どもの気持ち</p> <p>粘り強さ探求課題に対する思いの達成に向け、自己の学びを調整し続ける姿</p>

設定した子供の姿の実現に向け、各教科等において教育環境をデザインし研究を進めていくこととした。

(2) 校内における授業研究会

1年次研究では、校内において全職員が参加する授業研究会を行うこととした。これまでは4つのグループに分かれ授業研究会を行っていたが全員で1つの授業を見て研究会を行うことで、

研究についての共通理解を図りながら研究の進め方や方法について協議を行った。実施した3回の授業研究会には慶應義塾大学の鹿毛雅治先生を講師にお招きし、ご指導ご助言をいただいた。

①5月30日 第4学年総合『未来へとつながって池!!～持続可能な環境づくり～』

4年生は昨年度から継続して校内の三角池を題材として学習を行っている。授業では、三角池について委員会の5,6年生に何を伝えるべきかを考える授業を行った。教師の提示した課題が子供が追究したい問いとなっていたかについて議論する中で、課題設定の重要性について再認識することができた。また、子供一人一人の姿、記述、表情等を丁寧に見ていくことの大切さや問題解決のプロセスが重要であり、子供が学ぶことの大切さや意義を実感できる学びを展開していくことについてご指導いただいた。

②6月15日 第3学年国語『しゅるいがあるものをしょうかいしよう』『言葉で遊ぼう』『こまを楽しむ』

説明文の内容の大体を捉え、事例を挙げる順序には筆者のどのような意図があるか考える授業を行った。授業や日常の学校生活の中での教師の関わりあいにより、子供が言いたいことを自由に言うことができる学級の基盤をつくることの大切さについて改めて確認することができた。子供が意欲的に粘り強く学びを深めたかという「学びの筋」を大切にして授業をつくっていくことについてご指導いただいた。



③12月12日第1学年生活『かぞくにつこり隊』

家庭での仕事に取り組んだ子供たちがこれまでの自分の仕事を振り返り、よりよくする方法やコツを考える授業を行った。授業ではiPadを用い、個々の仕事の様子や振り返りを共有することも手立てとして取り入れた。子供が主体的に学ぶために可視化、共有化、焦点化が大切であることや主体的な学びのためにこそ、授業の構造化が必要であると確認することができた。

(3) 公開研究会

6月25日(土)には3年振りに参集で12教科17本の公開授業を行い、7月23日(土)にはオンラインで各授業の研究会を行った。公開研究前に行った校内の授業研究会の成果や課題から、子供の姿を大切にした授業研究を進め、各教科の授業を公開した。

2 1年次の成果と課題

(1) 成果

①子供の姿を中心とした授業研究

研究のスタートにあたり、「ともに学び、学び抜く子供」の姿と「意欲」「粘り強さ」について、各教科等において具体的な姿を設定したことで、子供の姿を中心にしながら各教科等において研究を進めることができた。校内の授業研究会においては、授業の中で多様に表れる子供の姿をあらかじめ想定した上で具体的に語ることを職員で共通確認し、研究会を行ってきた。どのような子供の姿が意欲的であるのか、そのような姿が見られるまでにどのような過程があったのか、粘り強く学びを深めるとはどのような姿か、どのような体験をすればよいのかなど、子供の姿をも

とに議論を行ってきた。このことは、目の前の子供の実態を把握し、子供の「学びたい」という関心・意欲を原動力として、「わかる」過程や内面で育まれる力に寄り添った研究、つまり、本校が長年掲げている「子供が真ん中」の研究の在り方についても、その重要性を再認識する機会となった。見取りが難しいと言われる非認知能力を追究するにあたり、今後も子供の姿をもとにした研究を進めていく。

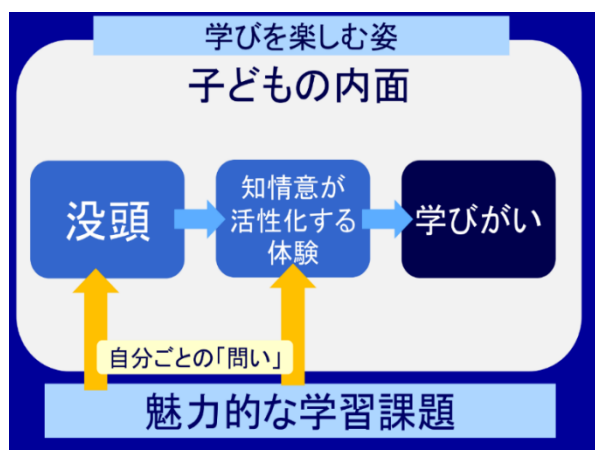


図4 令和4年度 本校初等教育公開研究会講演会より

②「ともに学び、学び抜く子供」について—「意欲」「粘り強さ」に注目した授業を通して—

公開研究後、それぞれの授業実践において見られた「ともに学び、学び抜く子供」の姿はどのような姿であったのか、各教科で振り返りを行った。その中の各授業実践において見られた子供の姿と、令和4年度本校初等教育公開研究会講演会において、講師の鹿毛（2022）が学習意欲について示した左のような図を照らし合わせると、以下のようにまとめることができる。

表4：1年次実践において見られた「ともに学び、学び抜く子供」の姿

<p>①魅力的な学習課題に関わる姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の問いをもち、解決したいと思う姿（思いをもち、取り組もうとする姿） ・ 自ら問いを見いだす姿 <p>②没頭・知情意が活性化する体験に関わる姿</p> <p><課題の追究に関して></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 課題について、調整しながら解決しようとする姿 ・ 見方・考え方を働かせ、課題を追究する姿 ・ 自分の考え（表現）をよりよくしようと試行錯誤する姿 <p><他者との関わりに関して></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自らの思いや考えを相手に伝えようとする姿 ・ 対話や交流を通して考えを深めている姿 ・ 様々な考えを聞き、自分なりの考えを見つけ出す姿 <p>③学びがいに关わる姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習したことを、次の学習や活動へ生かす（生かそうとする）姿 ・ 学んだことやその価値を実感する姿
--

表3より、各教科の設定した「意欲」については、子供たちが問いや目的意識をもつことに関するものが多くなっている。また授業実践後の振り返りからも、魅力的な学習課題の設定すること、子供が自分ごとの「問い」をもつことは、学習の入り口としての意欲を高めるだけでなく、その後の課題の追究に大きく関わることを確認することができた。理科の実践では、単元導入に

において生まれた「ずれ」や「違和感」から問いが生まれ、そして単元を通して問いを追究していくとする「粘り強さ」へとつながっていったことが成果としてあげられている。この例が示すように、学習課題や子供たちが問いをもつことが「意欲」「粘り強さ」の両方に大きく関わる事が確認できた。

(2) 課題

①「ともに学び、学び抜く子供」について

1年次の実践から、表4に示したように「ともに学び、学び抜く子供」の各教科における具体的な姿が見えてきた。しかし、1年次の実践から見えてきた子供の姿は、個々の子供の学ぶ姿が中心であった。子供が一人で「学び抜く」姿が見えてきた一方、他者と関わりながら学ぶといった「ともに学び」につながる姿を各教科の研究において明確にしていくことはできなかった。1年次では「自らの思いや考えを相手に伝えようとする姿」「対話や交流を通して考えを深めている姿」「様々な考えを聞き、自分なりの考えを見つけ出す姿」が「他者と関わりに関する姿」として見えてきている。しかし、めざす子供の姿に結びつく姿として明確にすることは十分でない。学校教育目標においては、人と関わりをもちながら主体的に学ぶ姿をともに学ぶ姿と捉えているが、各教科の授業においてはどのような姿であるか今後の研究において明らかにしていきたい。

②「意欲」「粘り強さ」に注目した授業について

<魅力的な学習課題の設定>

1年次研究より課題設定や問いの重要性を再認識することができた一方、学習課題の設定や、子供が自分ごとの問いをもつことについては課題も残った。1年次の実践の中で最も多かったのは教師の提示する課題と子供のもつ問いにずれが生じていたことである。子供の「意欲」や「粘り強さ」に働きかけることが難しくなるだけでなく、授業のねらいに迫ることが難しくなり、子供たちの学びの過程が途切れてしまう様子も見られた。学習課題の設定については、2年次の授業実践を行うにあたり十分に検討する必要がある。

<授業の構造化>

子供が主体的に学ぶために、場の設定といった適切な授業の構造化を図る必要があると考えている。「意欲」「粘り強さ」に働きかけるための授業の構造化について、各教科等で引き続き追究していく必要がある。子供がどのような体験を通してどのように学ぶのか、そのために教師はどのような教育環境をデザインし、教育的な関わりあいをしていくのか、教科の特性を踏まえ追究していく必要がある。

3 2年次の研究重点と研究内容

(1) 研究重点

各教科等において、「ともに学び、学び抜く子供」の姿を再検討し、めざす子供の姿を実現するための手立てを追究する。

1年次の研究より、研究主題である「ともに学び、学び抜く子供」を具体化した、めざす子供の姿が明らかになってきた。そこで、2年次研究では、昨年度の研究から得られた成果や課題をもとに、本研究のスタート時に各教科等で設定しためざす子供の姿について、より具体化を試みたり、設定した姿の妥当性を検討したりすることから行う。その評価や吟味といった作業を土台に、各教科においてめざす子供の姿を実現するための手立てについて研究を進める。

(2) 研究内容

「意欲」「粘り強さ」に働きかける手立て、そのほか「ともに学び、学び抜く子供」実現にむけての手立てを追究する。

1年次研究において「意欲」「粘り強さ」に働きかけるための手立てを講じ研究を進めてきた。2年次は、1年次研究において見えてきた子供の姿、教科等において講じた手立てについて検討し、さらなる充実を図っていく。また、教科等によっては、「意欲」「粘り強さ」以外に、その教科特性に応じた非認知能力に注目することも検討している。教科等の特性や子供の実態に応じた新たな手立ても講じて教育環境をデザインし、「ともに学び、学び抜く子供」の姿の実現をめざす。

1年次研究では、子供の姿をどのように捉えるか、子供がどのように学んだかを中心に、研究を進めてきた。2年次研究においても、子供たちがどのような体験を通じて、どのように学びを深めていくのかを想定し、研究を進める。

<引用文献・参考文献>

- ・文部科学省（2017）『小学校学習指導要領』東洋館出版社
- ・中央教育審議会（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築をめざして～全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」
- ・中央教育審議会（2019）「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」
- ・一般財団法人 教育調査研究所 代表者 新井郁夫（2021）『教育展望 臨時増刊 No.53 変革の時代の学校教育を展望する―「令和の日本型学校教育」をどのように進めるか―』
- ・山梨大学教育人間科学部附属小学校『平成27年度 研究紀要』
- ・山梨大学教育学部附属小学校『平成30年度 研究紀要』
- ・『総合教育技術 6/7月号』（2021）小学館
- ・『授業力&学級経営力2021年12月号』（2021）明治図書
- ・白井俊（2020）『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房
- ・中山芳一（2018）『学力テストで測れない 非認知能力が子どもを伸ばす』東京書籍
- ・鹿毛雅治（2013）『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』金子書房
- ・小塩真司編著（2021）『非認知能力 概念・測定と教育の可能性』北大路書房